

平成29年度岡山県子ども読書活動推進会議第1回会議の概要

- 1 日 時 平成29年10月2日(月) 13:30～15:30
- 2 場 所 岡山県庁分庁舎 102会議室
- 3 出席者 出席委員8名 相賀委員、大村委員、白神委員、塚本委員
徳山委員、東委員、行部委員、湯澤委員
(五十音順)
- 欠席委員2名 門田委員、坪井委員
生涯学習課 石本課長、齋藤総括副参事、官尾主任
高校教育課 欠席
義務教育課 江尻主任
岡山教育事務所 片山主幹
津山教育事務所 延原主任
報道なし、傍聴者なし

4 概 要

(1) 第4次岡山県子ども読書活動推進計画策定スケジュールについて

事務局	説明(資料1)
委員①	計画の策定スケジュールや具体的な内容について、質問はないか。
委員②	有識者会議の議事録は、公開されているか。
事務局	第1回会議の議事録は、ホームページで公開されている。第2回会議については、まだ配付資料のみの公開である。
委員①	国の「第4次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」策定の動きに合わせて、県では、今年度、計画策定に向けて情報収集をしていく。今回は、子どもの読書活動を取り巻く環境について議論したい。

(2) 第3次岡山県子ども読書活動推進計画の評価指標の状況について

事務局	説明(資料2)
委員①	資料2について質問はないか。毎回、未読率の話題になるが、勤務校での様子はどうか。
委員②	1年目なので学校のことは、まだ十分に把握できていないが、生徒は、本を読みそうだなという感触はもっている。
委員①	乳幼児期に本との関わりが少ない子どもは、やはり小学校でも本に手が届きにくいのか。
委員③	本校の子ども達は、本に慣れ親しんでいると思う。就学時健康診断の

	時に絵本を並べておくと、待ち時間に読んでいる姿も見られる。今、目の前にいる子ども達の様子から言うと、あまり本を読まなくて困るということはない。
委員④	小さい子ども達は、絵本が大好き。しかし、2極化は確実に進んでいて、本が大好きな家庭と全然触れられない家庭がある。そこが問題である。今、絵本を語り聞かせる人として、父親が増えている。園や保育所の先生達も毎日絵本の読み聞かせをしようとしているし、語りや読み聞かせボランティアの人を取り込もうとしている。祖父母の声など様々な人との触れ合いも大切にしている。最近は、家庭による違いも大きい。どんな形でも、本に触れると子ども達の目は生き生きとしているし、耳をそばだてて聞いている。もっと本が大好きになれる状況を作ってやりたい。この会議での議論が、いろいろな形となって出てくると嬉しい。
委員①	父親が新たな読み手というのは、今の時代を表している。第3次計画にもボランティアの活用とあるが、小学校では大体目標を超えている。中学校は、もう少し伸ばしていきたい。小・中学校のボランティアに関してはどうか。
委員③	本校では、月に1回ボランティアの方に来ていただいている。ボランティアの方も保護者や地域の方であり、仕事に就いているため、負担にならないようにご協力いただかないといけない。中には、「他の方は来れないだろうから」と何度も来られる方もいる。ご協力いただいていることを児童に伝えていかなければと思う。担任では紹介できない地域の民話や手作りの紙芝居を読み聞かせてくださることもありがたい。
委員①	小学生が読み聞かせを聞く様子はどうか。
委員③	保育園の時から、来ていただいているので、よく知っているし、慣れ親しんでいる。来られたら、話を聞く状態になっているので、話を聞かないとか面倒くさいという感じにはならない。語り口調を変えたり、児童に質問をしたり、変わった絵本を持ってきたりしてくださるので、6年生でも読み聞かせを楽しみにしている。決して1年生のためだけの読み聞かせではないと感じている。
委員①	保護者やボランティアの立場からはどうか。
委員⑤	ボランティアの立場から言うと、我が子の教室だけではなく学年を超えて行けるというのは、とても新鮮。しかし、私が行っている小学校は、市内でも大きな学校で、ボランティアの数が足りない。ボランティアで本の読み聞かせをすること自体が、ハードルの高いことで「我が子に読んでるように読んでください」と説明を受けても「私にはできない」という声をよく聞く。学校側からの積極的なアプローチがあれば、もっと間口が広がって参加率が上がると思う。また、お年

	を召された方、OBの方、民生委員の方などいろいろな人が入ってきてもいいのではないかと思う。
委員①	様々な立場の方に積極的に関与してもらえるとよい。以前、PTA役員の中に読書委員があればよいという案が出たことがある。いかがか。
委員⑤	良い案だ。そんな委員がいれば、とても多忙な司書も助かるのではないか。もっと学校が近くなるし、面白い。
委員⑥	私達がボランティアを始めた頃は、あまり図書館に行ったことがない親子がいたが、今は、ブックスタートも始まっているし、本と出会う機会は増えてきたと実感している。今の家庭は、いろいろな事情を抱えているので、家庭に全て望むのは難しい。幼稚園では、先生が積極的に読んでいて、読める人が読めば大丈夫。本好きにするために、頑張りすぎると逆にうまくいかない。おもちゃの一つとして、触れ合う手段の一つとして絵本を使ってほしい。小学校になると、コーディネーター役は学校司書である。学校司書がない市町村は、まずそこに力を入れてほしい。幼稚園では、毎年PTA会費で保護者の方が本を増やしていく。選ぶ人によってカラーが出るし、我が子の好きな本ばかりになることもある。ボランティアは素人なので、専門家がいるということは大事。学校司書という専門家がいるからこそ、安心してボランティアが入れる。ボランティア＝読み聞かせという構図もあるが、本に関わるボランティアは、本のカバーかけや学級文庫の整理など、しようと思えばいろいろある。学校側は、ボランティアを呼ぶ目的を職員間で話し合ってもらいたい。「何でもいいからしてくれたい」では、問題が起きることもある。学校に呼ぶ目的を共通理解した上で、声をかけてほしい。本を読んでもらうのは楽しだし、楽しい。でも、読んでもらうばかりで子ども達が本を読むようになるかというところではない。自分で本を読むためには、読むための練習が必要。図書館の使い方や大人が読んでいて本を紹介することも読書支援になる。
委員①	読書支援の定義など、第4次計画を立てていく上でも非常に大事な視点であった。これまでの読み聞かせ文化が根付いてきていることも確認できた。子ども達の姿について、大変有益な意見をいただいた。続いて、資料3について事務局お願いする。

事務局	説明（資料3・4）
委員①	今の説明で、放課後に十分読書時間がとれていないことが分かった。原因として、メディアの影響が考えられる。ここで、メディアや子ども達の姿で気になることを共通理解しておきたい。何かあるか。
委員④	携帯・スマホのことは、大変気になる。幼稚園児は、真似っこ遊びをよくする。昔はままごとだったが、今はスマホ操作の真似になってきた。実生活でも、保護者は、困ったらスマホに頼っている。保護者も

	本よさは分かっている。でも、読めない。この状況をどう打破するかが大事。
委員①	子どもの読書活動といっても、やはり大人が重要。大人の生活を見直す必要がある。公共図書館の立場からはどうか。
委員⑦	3、4か月の赤ちゃんと保護者対象のブックスタートを行っている。赤ちゃんと一緒にいてもスマホを操作している保護者が結構いる。一方で、最近、図書館発信のツイッターを始めたら、今までは来ていなかった方の行事などへの参加が見られた。メディアをうまく利用し、共存していきたい。また今後は、高校生の協力も考えていきたい。
委員①	新しい取組である。県立図書館ではどうか。
委員⑧	絵本のよさは皆さんご存知で、県立図書館で開催の赤ちゃんお話し会は、断らないといけない程申込が多い。しかし、小さい図書館では、人が集まりにくく、お話し会自体が成り立たなくなっているところもある。何か分からないことがあっても、図書館で調べるのではなくて、スマホで調べてしまう。すぐに情報が出てくるということで生活と切り離せなくなってきている。一方で、子ども達は、お話しが好きである。5、6年生でも喜んで聞く。読み聞かせボランティアも昔に比べると増え、定着してきていることも分かる。でも、自分達で読むことや、読む人数にはなかなかつながっていない。そこを工夫していく必要がある。
委員①	保護者の立場からはどうか。
委員⑤	フィルターをつけるとか、渡す年齢を考えるとこの話によくあるが、今はスマホに子守してもらっている人も多い。参観日で静かにさせるために、下の子に見せたり、公共の場で泣き叫ぶのを鎮めるために使ったりといろいろな所で見かける。そういう現状をみると、手段としてスマホを使うことは、どうにもならないのかと思う。目や耳から簡単に情報が入ってくるものがあれば絶対にそっちが強い。親の相当な覚悟や強い意識がなければ難しい。
委員①	インターネット社会において、子どもが置かれている状況は深刻であることがよく分かった。
委員⑥	学校図書館は、メディア教育リテラシーもしている。スマホの情報が全て正しいわけではないことも教育していく必要がある。今の子ども達は、ツイッターやLINEに書かれていると本当だと思ってしまう。ふざけて言うつもりで書いていても、文字で見た相手は、重々しく感じることもある。同じ文章でも取り方によって全く違うという問題も起きている。そのため、気持ちを表現するツールとして絵文字やスタンプが入ってきたという経緯があるとも聞いたことがある。
委員①	今言われたように、リテラシー教育が現状に追いついていないという問題がある。それぞれの発達段階に応じたリテラシー教育の必要性を感じる。大学でも、大学での学び方を学ぶ時間があるが、これからは、

	小中高大でインターネットを用いた学び方を学ぶ教育もしていく必要がある。これからも資料収集していかないといけない部分である。
--	---------------------------------------------------------------

(3) 第3次岡山県子ども読書活動推進計画の主な取組状況について

事務局	説明 (資料5・6・7)
委員①	おぎゃっと21で、読書活動ガイドに掲載している絵本の展示や読み聞かせを行ったのがとてもよい。研修が少ないという意見を受けての改善が見られた。昨年度の取組について、意見や提案があるか。
委員④	昨年、読書活動ガイドの作成に携わった。あえて年齢を書かずに、発達段階に応じた本の紹介をしたところや保護者も読んだことがないような科学絵本、昔話、心を大切にした本の紹介ページを入れたことがポイント。最後には、図書館の業務内容を紹介し、図書館のよさも周知できるように工夫した。
委員①	実際にガイドを配付した公共図書館ではどうか。
委員⑦	ブックスタートでガイドを手渡すようにしている。手渡すことによって公共図書館がどういう所なのかを知ってもらえるので、ありがたい。
委員①	その他、活動に関して新たな提案があるか。
委員⑥	今度「親子の読書活動ガイド」を増刷するときは、【図書館には本のプロがいます】を【本のプロである司書がいます】としてほしい。司書という言葉がどこにも出てこないの、是非入れてほしい。
委員①	休憩時、話題になったのだが、読書支援コーディネーターのような形で、司書が表に立って、目的を確認したり、PTA・ボランティアと学校を繋いでいくパイプ役あるいはコーディネーター役となったりすることは難しいか。
委員②	高校の場合、小中学校とは事情が異なる。学校によっても違いはあると思うが、勉強が最優先となりがちである。また本校では、保護者の関心もどこに進学するかということである。司書が全面に出てというのは、学校によっては考えられるかもしれないが、進学校の場合はイメージしにくい。
委員①	小学校では、どうか。
委員③	司書というより、司書教諭の仕事だと思う。今、ある市では、1校1人司書が実現出来ていなくて兼務をかけている状況であり、膨大な事務仕事に追われているのが現状。つないだり、調整したりするのは、司書教諭の役目である。今年、行われた新任司書教諭研修で、「自分がどんな仕事をしていいかわからない」「本のことで他の教員に声をかけてアプローチするのが難しい」と困っている司書教諭がたくさんいると聞いた。学校の動きを知っている司書教諭と本の専門家である司書とが一緒になって動くと司書の負担も少なくなる。
委員⑥	司書教諭には、学校図書館を授業で活用することで、子ども達の授業

	の幅が広がるという事例を増やしてもらいたい。学力テストの影響で、朝読書も若干減ってきているが、学校図書館は大事。教員は授業のプロ。本の選書は、本のプロである司書に任せたらよい。様々な教科で本を取り入れ、本とコラボした授業の事例を増やしてほしい。学力も伸びるし、本を読むことにもつながる。
委員①	個人のやる気に任されている部分もあるのではないかな。
委員⑥	本当はいろいろしたらよいと思うが、学校司書は学校に1人しかいないので、司書が全クラスの先生と授業でつながったら、パンクしてしまう。まずは、司書教諭のクラスで授業を行い、こういう仕方があるという成功事例を紹介し、他の教員にも広めていってほしい。また、県立図書館にあるような授業で使えるセットも増やしてほしい。
委員⑧	学校・家庭・地域とつながるのは簡単なことではないことかもしれないが、PTAと図書館と司書とが1つの委員会のようなものを作っている市町村もある。県立図書館の図書セットは、高校には貸出可能だが市町村の小・中学校に直接貸し出すことはできない。ただし、こういう本がほしいという依頼があれば準備はできる。
委員①	実際に貸し出すとなると物が動くので大変だが、選書レベルでおすすめリストのようなものがあればよい。
委員⑧	県立図書館で作成しているリストは、直接、館内やホームページで見ることができる。
委員①	今の話は、アクティブラーニングにもつながる内容だった。校内研究や研修会で本を活用した児童・生徒の学びの紹介があると、教員に伝わりやすいのではないかな。
委員⑧	遠くに住んでいる方は、県立図書館のことを知らない人も多い。今までは、近くの図書館で済ませてしまっていたし、市町村の図書館が県から本を取り寄せてくれていたということも知らなかった。
委員⑥	必ず県と市町村の図書館はつながっているなので、近くの図書館をしっかりと利用してほしい。
委員①	先ほど、夏の研修会の時期をずらしたことで、教職員の参加率が増えたとの報告があった。その中で、学校で活かせるような情報提供や図書館の利用方法のミニ講義があると教員も助かるのではないかな。また、リストを配付して周知を図るというのも有意義ではないかな。せっかくよいものがあるのに、周知されていないのはもったいない。その他、4次に向けての情報収集として、未読率や2極化、本と出会えない子へのかかわり方等で何かないかな。
委員②	同じ学校の中でも2極化は感じる。本を読む子は読むが、全然来ない生徒は来ない。進学校は、本に親しむ生徒は多いのではないかなという漠然としたイメージはあったが、商業や工業でも読む生徒と読まない生徒の差は激しいと聞いたことがある。

委員③	図書館までの距離が、長ければ長いほど未読率は増えると思う。休み時間になると外へ飛び出ていくような子も、司書に選書してもらった本を学級文庫に置いておくだけで、本を読むようになる。図書館へ行って読むことも大事だが、本を児童・生徒に近づけてあげることも未読率を下げる一つの手だと思う。
委員①	学級文庫の充実を図ることはよい。本を読みにくい児童・生徒にとっては、物理的な距離自体を縮めてあげることは有効な手段である。
委員⑦	公共図書館が、未読率にどれだけ貢献できているかは分からないが、図書館は楽しい場所、行ったら何かしている場所というワクワク感をもてるような所にしたい。一方で、ただ行事をするだけでなく、読書につなげていけるような取組もしていきたい。親が本好きでないと、子どもにとって図書館は遠い存在になってしまうので親に来てもらえるような工夫が必要になる。笠岡には有人島が多いので、学校司書を通じて島の子どもたちに本が届くような取組も行っている。
委員⑧	読む人は読むし、図書館に来る人は来るから、読まない人にどう図書館を知ってもらおうかが課題である。
委員⑤	自分が、子どもの貧困でずっと関わっていた子で、やることは破天荒だが、彼女の情緒は大変豊かだった。背景にはいろいろあっただろうし、いろいろな思いを抱えていたに違いないが、一人になった時にいつも本を読んでいたことを思い出した。それはどうしてだろうかと思い、関わりのあった方にそのことを尋ねた。すると、幼少の頃は、お母さんが一緒に住んでいて、その時に本に触れる機会があったのではないかとのことだった。実際には、その子と母親との関係の中で本と出会ういいチャンスがあったのだろうと今日の会議を聞きながら思った。どういう関わりであっても本に出会うというタイミングや体験が、その子の豊かな人生につながる可能性は十分にある。全く意味のない取組はなく、学校が取り組んでいる一つひとつに意味があると思う。
委員①	子どもの姿が浮かんできた。辛い環境でありながらも、本を介してお母さんの愛情を感じていたのだろう。
委員④	幼稚園に司書はいない。でも、本の大切さや本を読んであげてほしいということは伝えている。本がとても好きな実習生にその理由を尋ねると「この本は小さい時に読んでもらった」とか「これはおばあちゃんに読んでもらった本で忘れられない」と答える。根本にあるのは、読む人がその本が大好きであるということ。しかし、今は、好きな本がない子もいる。本を読んでもらったことがきっかけで、その本のことを好きになる子もいる。先ほども「体験と本とを結びつけていけたらよい」と言われていたが、結局大きくなってから役に立つことは、体験である。今、子どもを育てている親は忙しい。こうです、ああですではなくて、私達が手繰り寄せていくことが大事。まんべんなくいろ

	<p>いろな所でイベントを行い、絵本に触れる経験を一回でも多く与えてあげてあげたいし、伝えていきたいと思う。</p>
委員①	<p>未読率を上げていくには、数字がとても大切になる。しかし、本来私達が目指しているのは、子ども達が読書活動を通じて、豊かな心をはぐくみながら健やかに成長することである。</p>
委員⑥	<p>未読率に関してだが、本がよいという認識はみんなもっている。しかし、何のためにどうやって、どのように読めばよいかを親に伝えていない。だから、本がよいことは知っていても、その技を親がもっていない。真面目な人ほど一生懸命読むため、中には、本を通して親子共に辛い時間を過ごしている親子もいる。「こんな感じで読めばいいよ」とか「親子でゆったりと過ごす時間でいいんだよ」ということを伝えられる人がもっと増えてくれたら嬉しい。今は、親も忙しいので、親に読めととっても難しい。幼稚園等で読んだり、体験したりしたことを「今日は、こんなことをしたんですよ」とフィードバックするだけでも意味のあること。幼児期は、体験との呼応が大事。小学校に入ったら、自分で読む読書につなげていくために、読み聞かせだけでなく、自分で読んで面白かったという体験を積み重ねたい。小6までに「なんとか1冊読めたぞ」「俺も自分で1冊読めるぞ」と思わせてあげたい。その積み重ねこそが、未読率を下げる鍵。中高生は忙しくて読めない。小学生の間にある程度の体験をさせたい。そして、本は自分を助けてくれるという経験をした子や図書館の使い方を知っている子は、大人になっても読書に帰ってくることができる。なにより、図書館のすごいところは無償で貸してくれるところ。今、図書館を企業・民間に任せる動きもあるが、全ての人に開かれた図書館存続のためには、大人が図書館を大事にする運動が大事。もっと大人が図書館のことを本気で考えて、まだ図書館のない地域もあるので、もっと近くに本を置いていかないと未読率の解消にはつながらない。</p>
委員①	<p>御意見をありがとうございました。今日の意見が、広く共有されていくことを願います。</p>